

談話の「わけ (だ)」

Ratchanee Piyamawadee

本稿は談話における周辺の「わけ (だ)」を「談話のモダリティ標識」とし、「わけ」の機能、意味・用法及び位置付けの考察をした。その結果、「わけ」の機能は聞き手の関心を引く標識であり、話し手が提示 (話題、情報、例、意見)、確認、同感要求 (同情要求、同意要求)、注目性 (注意促進、強調)、驚き (呆れ、意外性、発見) を伝えるときに用いられることが分かった。また、「わけ」は命題めあてのモダリティから発話・伝達のモダリティに移行していることが明らかになった。更に会話の流れの分析から、話し手が自分の話を展開していく上で、二つの事柄を結び付けようとする意識が強く働いていることが分かった。この結びつきは「帰結」のような論理的な結びつきではないが、話し手が筋書きとしての面白さを聞き手に伝える上でどうしても必要になる結びつきである。話し手が自分の縄張り内の情報に聞き手を巻き込みながら、聞き手に伝えるために自分の断片を繋ぎ合わせていくという面があることから、周辺の「わけ」は発話・伝達のモダリティに移行してはいるが、典型的な「わけ」の論理的な「帰結」という性質にも結びついていると結論した。

Wake(da) in discourse

รัชณี ปิยะมาวดี

This study analyzes the function, meaning and usage, and the position of the periphery of the "wake" in a discourse. It treats "wake" as a discourse marker whose function is to attract the listener's attention to the speaker's utterances and to invite his/her responses, such as presentation of a topic, request for empathy, and surprise. In this position, "wake" has moved from propositional modality to become a discourse modality. As this periphery "wake" is used by the speaker to present plot details in an interesting manner, the connection of the two propositions is not a logical one like a syllogism, which characterized the typical "wake". However, since "wake" links together the speaker's information, this periphery "wake" still relates to the basic characteristics of the typical "wake".